

なぎさ通信

葛西臨海水族園 周辺の海から

第31号
June 2009

タイトル写真：「東なぎさ」のチゴガニ

カニたちの海辺

皆さん、「カニ」と聞くと、どんなカニを思い出しますか？ どうしても、ケガニやタラバガニ、ズワイガニなど、料理の材料としての印象が強いでしょうか（タラバガニは本当はカニではなく、ヤドカリの仲間です）。でも、この季節に葛西臨海公園に来ると、カニに対する印象が変わるかもしれません。駅から徒歩10分の便利さながら、わずか数百メートル移動しただけで10種類以上のカニを見ることができるのは、おそらく東京ではここだけでしょう。そう、葛西臨海公園は「カニのテーマパーク」と言っても過言ではないのです。

春から夏にかけて、たくさんの方が遊びに来る「西なぎさ」。でも、ほとんどの人は足もとに数万匹のカニがすんでいるのに気づいていません。一番多いのは、「なぎさ通信」で何度かご紹介したコメツキガニ。潮が引いた砂地にあらわれる鉛筆ほどの太さの巣穴と、そのまわりの「砂ダンゴ」が目印です。もっと泥っぽい場所にいるのは、横長の体の特徴のオサガニ。そして、今の季節に波打ち際で見ることができるのが、マメコブシガニです。



コメツキガニと、その巣穴・砂ダンゴ

直径2～3センチの半球型の体に大きなハサミ、それと対照的に細い足を持つマメコブシガニは、カニの常識に反して(?)、前に歩きます。ひっくり返して足のつけねを見てみると、ボールジョイントのように全方向に動く関節があるのがわかるでしょう。観察するために手に取ると、ぐったりと動かなくなることもあります。これは敵をだますための「死んだふり」で、しばらく手の上に置いておくと、モゾモゾと動き出すはず。また、もう1匹のカニを前にかかえて歩くマメコブシガニも初夏の「西なぎさ」の風物詩です。これはメスを大切に守っている頼もしいオスの姿です。



メスを守っているマメコブシガニ



水族園敷地内を歩くアカテガニ

もう一つの人工干潟・「東なぎさ」は、生物保護のため人間は立ち入り禁止ですので、「西なぎさ」以上にたくさんのカニがいます。ただ、「カニ相」は少し違って、チゴガニとヤマトオサガニ

が中心です。水流の関係からか、集まる砂や泥の質がほんの少し違うので、別の種類のカニがすみわけているのでしょう。チゴガニはコメツキガニによく似ていて、やはり巣穴や砂ダンゴを作るカニですが、白いハサミが目立ちます。求愛行動の際には、この白いハサミを上げ下ろしする「ダンス」をおこない、集団でのダンスはスポーツ競技場の観客がおこなうパフォーマンスのようです。

「西なぎさ」、「東なぎさ」の対岸、臨海公園側には、また別のカニがいます。岸壁の岩の隙間で子ども達が「カニ釣り」をして楽しんでいるのは、タカノケフサイソガニ。「西なぎさ」の転石の下に



石垣の間にひそむクロベンケイガニ

にもいますが、岸壁にいる個体のほうが大型です。鳥類園に繋るアシの根元には、水から離れても生活できるアシハラガニがいます。野鳥観察舎近くの石垣では、岩の間をよく見てください。クロベンケイガニが隠れているかもしれません。体やハサミが赤いのは、アカテガニやベンケイガニ。夏の大潮の夜には、波打ち際に降りてきて卵を産んでいるはずですよ。

さて、葛西臨海公園の「主役」であるこうしたカニたち。水族園では彼らをじっくり見ていただくようと、カニ専用水槽を作りました。場所は「東京の海」エリアのキャットウォーク（上部通路）で、現在タカノケフサイソガニ、チゴガニ、マメコブシガニ、ベンケイガニ、クロベンケイガニなどがご覧いただけます。運が良ければチゴガニのダンスや、メスを守るマメコブシガニの行動も見られるかも。水族園で見てから公園内でカニを探すか、公園内で見てから水族園でじっくり観察するか、あなたならどちらを選びますか？（教育普及係 井内岳志）

西なぎさ生き物観察ノート⑰ 待て待てマテガイ

春から夏にかけて、干潟の風物詩は潮干狩り。アサリやシジミが有名ですが、「西なぎさ」で“通”がねらうのはマテガイという二枚貝です。“マテ”の語源には諸説あり、細長い貝殻の両端から出た足と水管が真手(両手)のようだというのが知られています。変わった形をしていますが、味は大変良く、昔から身近な食材として地元の方に親しまれてきました。どんな調理方法でも美味しく食べられますが、個人的にはバター焼きがおすすめです。



マテガイ (左が足、右が水管)

さて、このマテガイは採集の仕方も一風変わっています。使う道具はスコップと塩。干潟に楕円形の巣穴を見つけたら、その穴にひとつかみの塩を入れます。するとびっくりしたマテガイが飛び出してくるので、その瞬間を逃さずにしっかりと貝殻をつかみ、巣穴から引きずり出す、という手順で行います。中にはびっくりした拍子に、体の一部である水管を自ら切ってしまうたり、先端が見えているのに砂中で踏ん張るのでなかなか出て来ないこともあります。一度捕まえたら離さずに、貝の前後運動に合わせて引き出しましょう。この貝は砂を掘る力が非常に強く、うかうかしているとものすごい勢いで潜って行ってしまいますのでご注意ください。ただ、穴の見分けはなかなか難しく、ゴカイやコメツキガニの巣穴に塩をいれ、「あれ、出て来ないぞ。」と待ちぼうけを食らうこともしばしば。スコップで表層の砂を削



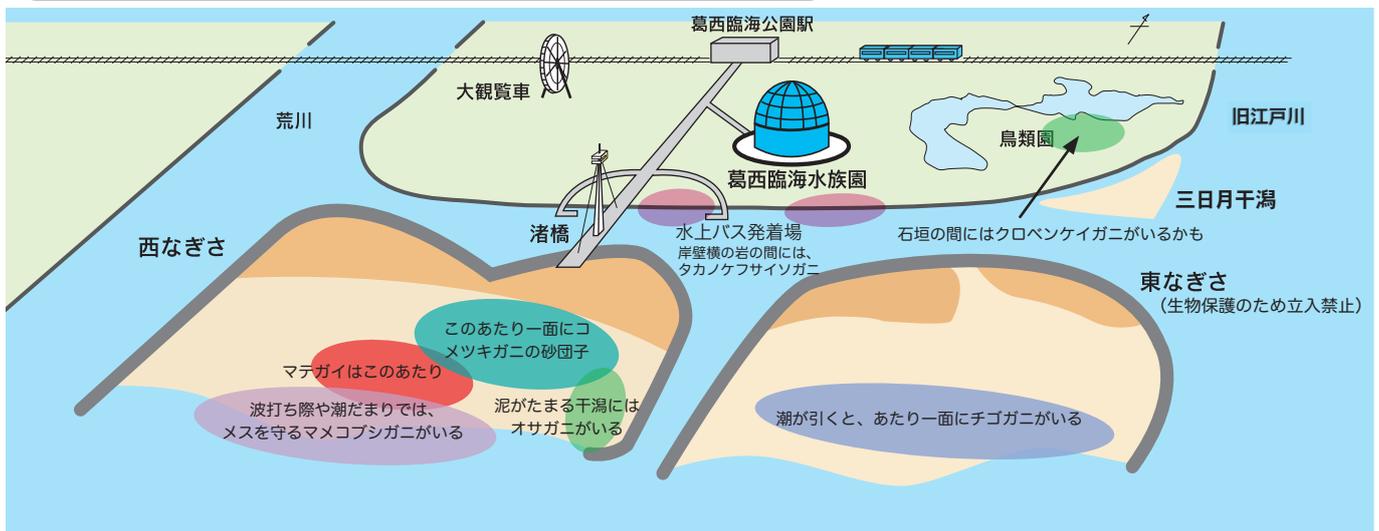
マテガイ掘り

ていながら、貝の断面と同じ楕円形の穴を探すのがコツです。

マテガイを狙っているのは人間だけではなくではありません。干潟を歩いていると、水鳥たちが食べたであろう貝殻がよく落ちています。鳥は塩など使わないので、きっと貝が穴から出てくる、潮がひいたばかりのときや満ちる直前を狙っているのでしょう。

マテガイ掘りは大変面白いので、ぜひ多くの方に体験して頂きたいのですが、「西なぎさ」のマテガイ生息数には限りがあります。干潟の風物詩を次世代に残すためにも、水鳥たちと海の恵みを分け合うためにも、採集はどうぞお手柔かかにお願います。(調査係 堀田桃子)

初夏の水族園周辺生き物マップ



●●●初夏の西なぎさ●●●

6～7月の「西なぎさ」では、潮干狩りを楽しむ人も多く見られます。でも、ここは養殖した貝をまいている「潮干狩り場」ではありません。生物の量には限りがありますし、貝やカニを貴重な食料にしている鳥もたくさんいます。大量に採集したり、本格的な用具を使って貝を獲るのはルール違反。また、干潟のカニを連れて帰っても、飼うのは非常に困難です。自然環境にも配慮して、節度をもって楽しみましょう。

編集後記：今回の号は、ちょっとしたカニの特集号。夏になると、水族園の敷地内でモカニが歩いていることがあります。ほとんどはベンケイガニやアカテガニなど、水がら離れても生きていける種類。なかには卵をガガエタメスのカニもいるので、産卵場所を探すのが今年の目標です。